

第7章 露朝接近の基本構図 — 2011年の金正日訪露と2015年の金正恩訪露中止の比較 を通じて —

兵頭 慎治

はじめに

北朝鮮とロシアの二国関係は密接なものではない。政治的には首脳間の接触が途絶えているほか、経済的な相互関係も希薄である。2014年のロシア極東地域の貿易高に占める北朝鮮の割合はわずか0.1%であり、2014年の北朝鮮の貿易高に占めるロシアの割合は1.2%に過ぎない¹。安全保障面では、ロシアは朝鮮半島の非核化を望んでいるものの、北朝鮮の核・ミサイル開発はロシアにとって直接的な軍事的脅威ではない。他方、北朝鮮は2016年1月6日に水爆実験に成功したと発表し、2月7日には「人工衛星」と称する弾道ミサイルを発射しており、核・ミサイル能力の向上を図る姿勢に対して、ロシアの批判の度合いは高まっている。以上から、北朝鮮に対するロシアの戦略的な関心は二義的であり、逆にロシアに対する北朝鮮の戦略的な関心も限定的である。

それでも、近年の露朝接近の動きを振り返った場合、対中関係を改善しようとする北朝鮮がロシアに接近し、ロシアがそれに応じるという一定のパターンが繰り返されているように見受けられる。つまり、「露朝関係は中朝関係の従属変数」という見方である。そこで、本稿は、2011年に実現した金正日（キム・ジョンイル）朝鮮労働党総書記の訪露と、2015年に予定されていた金正恩（キム・ジョンウン）第一書記兼国防第一委員長の訪露中止をケーススタディとして取り上げ、これら2つの事例を比較することで、上記の見方が適切であるかどうかを検証する。

1. ケース1：2011年の金正日総書記による訪露

(1) 9年ぶりの首脳会談実現の背景

第1次プーチン政権発足後、2000年から2002年にかけて毎年露朝首脳会談が実施されていたが、それ以降、首脳間の接触が途絶えていた。しかしながら、2011年8月24日に、金正日朝鮮労働党総書記が専用列車で訪露し、東シベリアのウラン・ウデ近郊の軍事施設で、ドミトリー・メドヴェージェフ（Dmitry Medvedev）大統領との間で9年ぶりの露朝首脳会談が実施された²。

首脳会談の直前にあたる2011年5月には、当時のミハイル・フラトコフ（Mikhail Fradkov）対外情報庁（SVR）長官が平壤で金総書記と会談したほか、6月にはロシアの政府系天然ガス企業ガスプロムのアレクセイ・ミレル（Aleksey Miller）社長が北朝鮮の金英才（キム・ヨンジェ）駐露大使とモスクワで会談し、北朝鮮を経由してロシアと韓国を結ぶ天然ガス・パイプライン敷設問題について協議していた。9年ぶりの首脳会談においては、政治問題に関して、金総書記は六者会合に前提条件をつけずに復帰すると改めて表明するとともに、問題解決に向けてミサイルと核兵器の実験と生産を凍結する用意があると発言した。さらに、経済協力では、ロシアから北朝鮮を経由して韓国に至る天然ガス・パイプ

ラインの構想を実現させることで一致し、両国のガス会社で共同委員会を作り、韓国のガス会社とも協議しながら具体化を進めることで合意した。また、首脳会談とほぼ同時期にコンスタンチン・シデンコ（Konstantin Sidenko）東部軍管区司令官（当時）が平壤入りして、2012年から捜索・救助訓練を再開することで合意するなど、露朝間の軍事協力を再開させる動きもみられた。

天然ガス・パイプライン構想は、ロシアの天然ガスを北朝鮮経由で韓国まで運ぶものであり、全長約1,100キロのうち約700キロが北朝鮮領内を通過する。ロシアの大手ガス企業ガスプロムによると、ロシアから韓国へのガス供給量は年間100億立方メートルで、供給期間は30年間で予定している。政治的に不安定な北朝鮮の内部を通過することから、実現可能性を疑問視する声も多いが、首脳会談後、露朝間において北朝鮮に支払われるランジット料金に関する協議も行われた。

さらに、首脳会談では、2007年から中断していた北朝鮮の対露累積債務の帳消しに関する協議の再開も合意された。その結果、翌2012年9月には、両国の財務次官が「旧ソ連期に提供された借款により北朝鮮がロシアに負った債務の調整に関する協定」に署名し、対露債務110億ドルのうち9割を免除し、残額は20年間の均等割りで償還し、北朝鮮の開発案件（資源、保健、教育）に投資することが合意された³。但し、ロシアは、ベトナム、モンゴル、シリア、アフガニスタン、イラクなどにも、旧ソ連時代の対外債権の多くを同じく減免しており、北朝鮮だけを特別扱いしているわけではない⁴。

当時の朝鮮中央通信は、金総書記のロシア非公式訪問はロシア側からの招請であると伝えたが、ロシア側の見方を総合すると、9年ぶりの首脳会談は北朝鮮側のイニシアティブによるものであり、中国に大きく依存する北朝鮮が対外関係を多角化するために、それまで疎遠であったロシアにアプローチしたと理解された。

このように、9年ぶりの首脳会談を契機として、両国の関係改善の動きが加速するかと思われたが、以下の2つの理由により、露朝関係は再び足踏み状態に陥った。第1は、2011年12月の金正日死去に伴う金正恩体制への移行である。権力移行を進める金正恩が内政問題に専従せざるを得なくなったほか、金正日のようにロシアとの間で外交バランスを図るといった対外姿勢がみられなくなった。第2は、2013年2月に実施された3回目の核実験により、北朝鮮に対するロシアの不信が高まったことである。ロシアは、核実験に関して、「我が国と何十年にもわたる善隣関係で結ばれている国が国際法規を無視したことは、国際社会からの非難および相応の反応に値する」という厳しい内容の外務省声明を発表して、北朝鮮に対する国連制裁決議に賛同した。

このように、北朝鮮側の対露政策が見通せなくなり、北朝鮮に対するロシアの批判が高まったことから、2011年に再開された両国の政府高官による相互訪問も途絶え、ガス・パイプライン構想に関する協議や軍事・インテリジェンス分野における交流再開の動きも停止することとなった。他方、ロシアと韓国の間では、2013年11月13日にウラジーミル・プーチン（Vladimir Putin）大統領が韓国を公式訪問して朴槿恵（パク・クネ）大統領と会談し、両首脳は北朝鮮の核保有を認めない旨の共同声明を発表するなど関係強化の動きが続いた。関係再開の動きが急速に途絶えること自体、露朝関係の強化が両国にとって戦略的に重要な課題ではなかったことを示している。

(2) ロシア外交における「中国ファクター」

今回の露朝接近の動きに関しては、ロシア側においても、「中国ファクター」が確認される。9年ぶりの首脳会談が実現した2011年前後において、ロシア内部において対中不信の高まりがみられていたからである。

中露関係は、公式的には「歴史的な最高水準」と説明されるが、国境が最終画定され、合同軍事演習が開始された2005年前後がピークであったと考えられる。実利面では、中国への武器輸出が落ち込み、資源の輸出価格を巡って対立が続いているほか、戦略面でも、対米牽制の観点から戦略的に協調するというモチベーションは希薄化している。むしろ、多極世界の一翼を担う隣国中国に対して、ロシアがどのように向き合うかが安全保障上の重要課題となっている。

ロシア軍の動向や軍近代化の動きを観察すると、「中国ファクター」が増大しているものと考えられる。例えば、2010年末に新設された東部軍管区は旧「極東軍管区」から管轄する領域を拡大し、中露東部国境全体を同軍管区が一元的に管理する態勢となった。また、北極の海水溶解により北方航路が誕生することから、ロシアは将来的な中国の北方海洋進出を懸念していると考えられる。2008年10月にソブレメンヌイ級駆逐艦など中国艦船4隻が津軽海峡を通過して、日本海から太平洋に初めて抜ける出来事があったが⁵、ロシアはこれに衝撃を受けたとされる。将来的に中国艦船が宗谷海峡を通過して、ロシアの「内海」であるオホーツク海に及ぶことをロシアは危惧しているとみられる。

こうした中露関係の変化により、ロシアが朝鮮半島政策において独自路線を模索する余地が生まれ、それが2011年の9年ぶりの首脳会談に結びついたものと考えられる。北朝鮮問題に対するロシアの基本姿勢は、中国と同様に北朝鮮の立場を擁護するというものであったが、ロシアの中国離れの動きが北朝鮮問題をめぐる中露間の政治的なスタンスの違いに表れつつある。例えば、北朝鮮に対する国連での制裁決議においても、ロシアは中国に比べてより厳しい姿勢を示すようになったほか、2010年3月に発生した韓国哨戒艦沈没事件に関してもロシアは独自の調査団を派遣した。

2010年3月下旬に発生した韓国哨戒艦沈没事件を受けて、韓国を中心とした国際調査団が北朝鮮による魚雷攻撃が原因であるとの調査結果を公表したが、朝鮮半島における緊張の高まりを懸念するロシアは5月末に4名の軍事専門家を韓国に派遣して独自の調査を行った。また、セルゲイ・ラヴロフ（Sergey Lavrov）外相は、同年12月13日に訪露した北朝鮮の朴宜春（パク・ウィチュン）外相に対して、延坪島砲撃事件、新たなウラン濃縮施設、核・ミサイル開発の停止を求める国連安保理決議に違反すると非難した。ロシアが、公式な場で北朝鮮を直接非難するのは初めての出来事である。その後、国連安保理常任理事国でもあるロシアは、安保理緊急会合の開催を要請して、南北間の緊張緩和を求める動きも見せた。

2. ケース2：2015年の金正恩第一書記による訪露中止

(1) 金正恩第一書記の初外遊先としてのロシア

次に、2015年に予定されていた金正恩第一書記による訪露について検討してみたい。2015年5月9日、モスクワの赤の広場で毎年恒例の「対独戦勝記念式典」が盛大に実施さ

れた。ウクライナ危機による欧米諸国との対立に加えて、本年が「第二次大戦終結 70 周年」にあたったことから、2015 年の式典は例年以上に愛国ムードに包まれた。欧米の指導者の多くが欠席する中、中露の連携ぶりが内外に誇示される結果となった。ナポレオン 1 世との戦いが「祖国戦争」(1812 年)と呼ばれるのに対し、当時のソ連人口の 12%にあたる約 2,700 万人の犠牲者を出したナチスとの戦いは「大祖国戦争 (1941 ~ 45 年)」と呼ばれ、5 月 9 日はロシア・ナショナリズムを鼓舞し、対外的に国威発揚を図る重要な祝日となっている。

2005 年の「対独戦勝 60 周年記念式典」は、当時のジョージ・ブッシュ (George Bush) 米大統領やゲアハルト・シュレーダー (Gerhard Schröder) 独首相、小泉純一郎首相をはじめとする 53 カ国の首脳が一堂に会した。今回、プーチン大統領は 68 カ国の指導者に招待状を送ったが、ロシアに制裁を科す日本を含めた欧米諸国が参加を見送ったため、式典参加者は BRICS 諸国 (ブラジル、インド、中国、南アフリカ) やベトナムの指導者、国連のパン・ギムン事務総長など約 30 人程度にとどまった。ドイツのアンゲラ・メルケル (Angela Merkel) 首相は記念式典を欠席し、翌日無名戦士の墓に献花するとともに、首脳会談でプーチン大統領にウクライナとの対話を呼びかけた。旧ソ連諸国からの参加は、2005 年は 11 カ国であったが、今回はカザフスタンなど 6 カ国となり、ロシアの盟主ベラルーシのルカシェンコ大統領も早々と欠席を表明した。外国首脳の参加が限られる中、ロシアとしては金正恩第一書記の参加を大いに期待していたであろう。2014 年 3 月のクリミア編入以降、ロシアと欧米諸国の関係は大きく悪化した。欧米諸国との関係が悪化した際に、同じく欧米諸国が批判する北朝鮮にロシアが接近する傾向がある。

「対独戦勝 60 周年記念式典」の目玉は、クレムリンに面した赤の広場における軍事パレードである。今回は、過去最大規模となる 1 万 6,000 人の兵士らが参加し、約 200 点の地上装備、143 機の軍用機が登場した。ベールに閉ざされていた最新型戦車「T14 アルマータ」や、米国のミサイル防衛網を無力化する地上移動型大陸間弾道ミサイル (ICBM) 「RS24 ヤルス」などもお目見えした。その軍事パレードの直前、プーチン大統領は、「我々が直面する一極世界を築く試みや軍事同盟的な考えに回帰する動きは世界の安定を損なうものである」と述べ、米国や北大西洋条約機構 (NATO) をけん制した。今回の式典の狙いは、政治的にはウクライナ危機後の中露連携を、軍事的にはロシア軍の装備近代化を、それぞれ内外にアピールすることであったと言えよう。

欧米の首脳が数多く欠席するなか、今回の陰の主演は中国の習近平国家主席となった。軍事パレードでは、中露首脳がひな壇に臨席し、パレードでは人民解放軍が初行進するなど、両国の協調ぶりが印象に残った。プーチン大統領は、ドイツのナチズムや日本の軍国主義と戦った国からのすべての招待客を歓迎すると述べ、これまであまり触れることがなかった「日本の軍国主義」というフレーズを用いるなど、中国に対して政治的配慮を示した。このように、ウクライナ危機以降、ロシアの中国傾斜が強まっていることは疑いない。2014 年 2 月のソチ五輪開催時に、習近平国家主席がプーチン大統領に対して、2015 年の「第二次世界大戦 70 周年記念行事」に相互参加することを呼びかけた。当初、プーチン大統領はこれに応じなかったが、ウクライナ危機後の 2014 年 5 月に上海で開かれた中露首脳会談で、最終的にその要請を受け入れた。中国側は、9 月 3 日に日中戦争の発端となった北京市近郊の盧溝橋にて「抗日戦争 70 周年記念行事」を開催し、これにプーチン大統領が答礼参加した。

当初、参加が有力視されていた北朝鮮の金正恩第一書記は、直前になってキャンセルとなり、ロシアが期待した同氏の「外交デビュー」は実現しなかった。訪露条件として、ロシアは核開発やミサイル実験の中止を、北朝鮮は無償援助の提供などを要求したと報じられているが、両者の条件が折り合わず、北朝鮮は対外的な国家元首にあたる金永南（キム・ヨンナム）最高人民会議常任委員長を式典に代理出席させた。中国との関係が芳しくない北朝鮮は、2014年からロシア重視の外交姿勢に転じたが、露朝関係の本格的な改善には限界があることが改めて浮き彫りとなった。

（2）訪露キャンセルの理由

金正恩第一書記の「対独戦勝70周年記念行事」への参加に関して、ロシア側の反応ぶりを整理すると、以下の通りである。

ロシア側の報道を見る限りにおいて、金正恩第一書記の訪露を最初に申し出たのが、ロシア側なのか北朝鮮側なのかについては明らかではない。2014年11月20日、ラヴロフ外相は「首脳レベルで接触する用意があることを確認した」と述べており、この時期に、既に外交ルートを通じて両国が協議していたことが確認される。その後、12月19日、ドミトリー・ペスコフ（Dmitry Peskov）大統領報道官が「ロシアが金正恩氏に対独戦勝記念日への参加を要請した」ことを明らかにしている⁶。

そして、2015年1月21日にラヴロフ外相が「金正恩氏参加に肯定的なシグナルあり」と述べた上で、1月28日にペスコフ大統領報道官が「金正恩氏が出席することを確認した」ことを明らかにした。この段階では、北朝鮮側がロシアに参加の意向を伝えていたものと推測される。これを受けて、ロシア側は金正恩第一書記の受け入れ準備を行っており、モスクワでは同氏が宿泊するホテルも確保されていた。「対独戦勝70周年記念行事」の直前にあたる4月22日、ユーリー・ウシャコフ（Yury Ushakov）大統領補佐官（外交担当）が金正恩氏の訪露意向を確認したと述べたため、金正恩第一書記の訪露は予定通り実施されるものと思われていた。さらに韓国の情報機関である国家情報院も、4月29日に開かれた国会情報委員会におけるブリーフィングで「金正恩第一書記がロシアを訪問する可能性が高い」と報告した。

しかし、翌日の4月30日、ペスコフ大統領報道官は、金正恩第一書記が国内事情により平壤にとどまることになった旨外交ルートを通じて連絡があったと述べ、北朝鮮が直前になり訪露をキャンセルしたことを対外公表した⁷。そのため、「対独戦勝70周年記念行事」には、金正恩第一書記に代わって、金永南最高人民会議常任委員会委員長が代理出席し、金正恩国防第一委員長の親書を手交した。

その後、北朝鮮側が訪露を中止した理由について、ロシアのメディアや有識者等が様々な形で論じているが、ロシア側の議論をまとめると以下の4点に集約される。

第1は、金正恩第一書記の受け入れに関するロシア側の態勢に不備があったというものである。具体的には、多くの首脳陣が訪れる中で、金正恩第一書記が他の賓客に比べて厚遇されないことが判明したため、北朝鮮側がそれに反発したとの見方である。また、北朝鮮が期待するような警備態勢をロシアが準備できなかったからではないかとの指摘もある。ロシアからすれば、欧米諸国の多くの首脳が欠席する中、金正恩第一書記の参加は歓迎していたものと思われるが、それでも習近平国家主席と同等の扱いはできなかったであ

ろう。そもそも朝露関係は疎遠であり、北朝鮮の核・ミサイル開発に対するロシアの批判は高まっていたからである。

第2は、対中要因である。金正恩第一書記が初の外遊先として中国ではなくロシアを選んだことに対して中国側が反発したか、あるいは北朝鮮側が中朝関係への悪影響を懸念して断念したのではないかとの見方である。金正恩第一書記には、習近平国家主席が2014年7月に平壤を訪問せずにソウルを訪問したことに対して不満があるとみられている⁸。金正恩第一書記が初外遊先としてロシアを訪問することに関しては、中国は必ずしも快く思わなかったであろう。それでも、中国が北朝鮮に何らかの圧力を加えたかどうかは疑問である。例えば、ロシア科学アカデミー極東研究所朝鮮研究センターのアスモロフ主任研究員は、「中国は注意深く観察しているが、ロシアと北朝鮮の関係発展を積極的に妨げようとはしていない。中国政府はおそらく、自国の立場へのいかなる脅威にもならないことを理解しているのだろう。」との見方を示している⁹。

第3は、北朝鮮がロシア側に示した「国内事情」であり、突発的な北朝鮮の内部事情により金正恩第一書記が本国を離れることができなくなったというものである。ロシア政府が公式に金正恩第一書記の訪露キャンセルを公表した4月30日には、玄永哲（ヒョン・ヨンチョル）人民武力部長が粛清されたとみられている¹⁰。しかも同氏は、4月13日、盧斗哲（ロ・ドゥチョル）副首相とともに訪露し、金正恩第一書記のロシア訪問についてロシア側と協議していた。4月15日にショイグ国防相は、「金正恩第一書記が5月9日の対独戦勝記念式典に出席するためロシアを訪問することを心待ちにしている」と面談した玄永哲人民武力部長に述べていたのである。同人粛清の理由については様々な憶測があるが、一部のメディアは、訪露した玄永哲人民武力部長がロシア製兵器の導入に関してロシアと協議した際に、「若い人間は政治ができない」と発言するなど金正恩第一書記を批判する言動がみられたと報じている¹¹。金正恩体制そのものは決して不安定ではないと考えられていたが、それでも要人の粛清が繰り返されている。

さらに、次のような見方も指摘されている。北朝鮮側は、当初から、最初の外遊先としてロシアを選ぶつもりはなく、訪露を直前にキャンセルすること自体が計画されたものであるという見方である。北朝鮮にとって外交上最も重要なのは中国であり、ロシアに接近する素振りを見せながら中国に揺さぶりをかけることが狙いであった。ちなみに、本研究プロジェクトのメンバーでもある平井久志先生は、「外交経験のない金正恩第一書記が最初の外国訪問を今回のようなマルチの外交舞台にすることはリスクが大きく、最初の訪問国をロシアにすることは中朝関係にもマイナスになることなどを理由にその可能性は低い」と指摘していた¹²。

真の理由を見極めることは困難であるが、いずれにせよ直前の訪問キャンセルにより、「北朝鮮がロシアの顔に泥を塗った」という論調がロシアのメディアでも流され、露朝関係に否定的な影響をもたらしたことは疑いないであろう。

おわりに

北朝鮮は対中関係の冷え込みを背景として、ロシアはウクライナ情勢をめぐる欧米との関係悪化を受けて、両国ともに露朝接近に共通の外交的な利益を見出しているようであるが、現時点ではこうした動きは外交的な戦術レベルのものにとどまっている。露朝接近の

基本構図は、対中関係の管理という点において北朝鮮がロシアに接近し、ロシアがそれに呼応するというものである。2011年の金正日の訪露も、2015年の金正恩による訪露中止も、ほぼこの構図で説明が可能である。ロシアにとっての北朝鮮は、戦略的には二義的な存在に過ぎないこと、北朝鮮の核保有に対してロシアが否定的であることから、露朝関係の戦略的な深化を予断するのは時期尚早であろう。国際社会からの反発にもかかわらず、2016年1月に第4回目にあたる核実験と2月にミサイル発射を北朝鮮が断行した。これにより、中朝関係はさらに悪化するものと見込まれる。こうした中、北朝鮮によるロシアへのアプローチが強化されるのか、またそれに対してロシアがどのような反応を示すのかが注目される。

— 注 —

- 1 ラヂオ・プレス『ロシア政策動向』（ラヂオ・プレス、2015年3月31日）。
- 2 一連の事実関係は、ラヂオ・プレス『ロシア政策動向』による。
- 3 *Izvestiya*（2011年9月14日）。
- 4 ラヂオ・プレス『ロシア政策動向』（ラヂオ・プレス、2012年10月15日）。
- 5 『平成21年版防衛白書』、〈http://www.clearing.mod.go.jp/hakusho_data/2009/2009/index.html〉。
- 6 BBC News, 28 January 2015, 〈<http://www.bbc.com/news/world-asia-31015079>〉。
- 7 タス通信 〈<http://tass.ru/en/russia/792709>〉。
- 8 平井久志「『意地』より『実利』を選択：金正恩氏『訪露ドタキャン』の背景」（新潮社フォーサイト、2015年05月03日）〈<http://blogos.com/article/111395/>〉。
- 9 ロシアNOW（2015年7月2日）〈<http://jp.rbth.com/politics/2015/07/01/53479>〉。
- 10 産経新聞（2015年5月13日）〈<http://www.sankei.com/world/news/150513/wor1505130020-n1.html>〉。
- 11 産経新聞（2015年5月27日）〈<http://www.sankei.com/world/news/150527/wor1505270024-n1.html>〉。
- 12 平井久志「『意地』より『実利』を選択：金正恩氏『訪露ドタキャン』の背景」（新潮社フォーサイト、2015年05月03日）〈<http://blogos.com/article/111395/>〉。

